

環境教育人を訪ねて 第4回 森田 茉莉子さん

NPO 法人霧多布湿原ナショナルトラスト (霧多布湿原センター勤務)

霧多布の 自然と人に魅せられて

文：垂水 恵美子 (JEEF 職員)

北海道東部、森と海に囲まれるように広がる湿原・霧多布湿原。ビクターセンター(霧多布湿原センター)以下、センター)で子どもたちにもち環境教育を行なっているのが、NPO 法人霧多布湿原ナショナルトラストの森田茉莉子さんだ。センターで定期的に行う「きりたつぷ子ども自然クラブ」のプログラムをはじめ、大人向けのエコツアーや学校向けの授業を通して、霧多布の自然や人の魅力や歴史を伝えている。「子どもたちは楽しそうに参加してくれます。中学生になって、ボランティアとしてお手伝い側になってくれる子もいますよ」

プログラムの講師には地元の人を呼んで、乗馬やカヌー、無人島体験、工作を通して地元の文化や伝統、自然、そして人間関係子どもたちは学んでいる。その成長を見守る森田さんは、霧多布に移住して7年になる。

「学生の時に霧多布へ来て、霧多布で暮らす人たちとこの自然に出会って、ここで働きたいと思いました」

森田さんの出身は千葉県。里山保全の活動をする親にくっついて、子どもの頃から参加していた。スタッフのおいちゃんやと焚き火しながらお喋りしたり、地元のお祭りに参加したり、活動に参加する大学生もたくさんいて。そんな場が彼女にとっては遊び場であり、日常だった。

転機は大学入学の年だった。授業の一環で自然教育研究センター(CES)のプログラムを受け、これが仕事になるのだと知ったこと



だった。卒業論文執筆のために霧多布を訪れ、豊かな自然と、そこに住む人たちの温かさを感じ、あつというまに魅せられた。センターのある浜中町は、どんどん人口が減っている。理由のひとつは出て行った若者が戻ってこないことだ。出ていくことは止めないが、出て行った時に浜中のいいところを思っ、帰りたいなと思っしてほしい。自分の生まれ育った地域の良さは、外に出ていろんな体験をして初めてわかるもの。その一つに自分の活動がなった。といいと森田さんは語る。

「私は霧多布で出会った人たちとの繋がりで、自分の人生が変わったと感じています。いま職業選択で悩んでいる若い人には、人が繋いでくれる輪を大切にしてもらいたいです」

美味しい食材と楽しい体験、温かい人たちがつくる霧多布を訪れてみてほしい。